
Angel Beats ! Another Story - 空 -

霜月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats! Another Story 空

【Nコード】

N1198V

【作者名】

霜月

【あらすじ】

これは“人でない少年”と、自らの人生に抗った少年少女達が駆け抜けた瞬きの間の青春物語。
新連載、オリ主です
がメインはSSSです。原作で過去が明らかになってる人は若干優遇されますw

Prologue

「この世界の秘密を教えてやろうか？」

どれくらい前だったか正直記憶が曖昧だが、変な男に出会った。
それからだ。

自分か世界か、どちらかが狂った。

Prologue

『さあ、旅を始めよう』

「であるから、nは2の——」
単調に進められていく授業。

この授業すらもう何回も受けていると思っているのは俺だけらしい。

学期末のテストももう何度も受けている気がするが、クラスメイトは誰一人そんなことを口にしないのだ。

(……ん?)

授業に飽き飽きしてふと窓辺を見ると、さっきまで退屈そうに欠伸をしていた友人がいない。

教室を出ていった気配は全くなかったが……。

「なあ」

教師の目を掻い潜って隣の奴の肩を叩く。

「水上のやつどこいったんだ？」

自分は何一つ変なことをきいたつもりはなかった。

「は？」

しかし奴は怪訝な表情で何を言っているんだとても言いたげな視線を俺に向けてくる。

もしかして。

「……誰だ、それ」

「……………」

まただ。もう何度も味わった背筋が冷たくなっていく感覚。

「み、水上だよ、水上信也。昨日だって一緒に飯食ったろ？」

「なに言ってるんだよ、昨日は俺とおまえの二人だったじゃねえか」

「おまつ、水上も一緒だったろ！？」

勢い余って椅子を倒して立ち上がってしまい、クラス中の視線が集まる。

「お、落ちつけて」

「海北、何してる！」

教師が苛立ちを見せているがそれどころではなかった。

……この世界はおかしい。

いつの頃からかクラスにはたびたび転入生がやってくるようになった。

それはまだいい。問題はクラスの連中がまるで転入生が初めからいたかのような態度を取るのだ。

当然転入生は気味悪がつてそのうち教室に来なくなる。

たまにも好きなのかクラスに馴染んでいく奴もいるが……友人であった水上もその一人だった。

しかしそういう奴はいつしか消えていく。
ある日突然神隠しにでもあったかのようにふといなくなるのだ。
そしてクラスの奴はまるでそんな人間は最初から居なかったと言
わんばかりにそいつのことを忘れちまっている。
そんなことをもう何度も何度も繰り返してきた。なのに、誰もこ
の奇妙さを指摘しない。

狂っているのは世界か俺か。後者だとは思いたくなかった。

「海北、座れ」

「なんなんだよ！ クラスメイト一人消えてなんでんな平然とし
てられるんだよ、おまえらおかしいぞ！」

「クラスメイトって」

「なに、なんのこと……？」

「水上だよ！ あいつ毎日楽しそうに学校来てたろ！？ この前
の体育祭誰よりも盛り上がったじゃねえか、憶えてるだろ！？」

『……………』

駄目だ。

こうまで奇異な視線を向けられると狂っているのはやはり自分な
のかとさえ思う。

それでも俺は覚えている。つい数分前まで退屈そうに欠伸をしな
がら黒板を眺めていた水上信也の存在を。

「——なんで」

「……落ち着いて」

「??」

後ろから裾をひっぱられる。後ろの席の生徒会長が俺をなだめよ

うとしてるようだった。

「なあ立華、水上は確かにいたよな、あそこにいたよな!？」

「……ええ、あなたは間違ってる」

「やっぱり——」

少しだけ希望が見えた気がしたが、

『おい海北ー、立華さんつきあわせんなよー』

『おまえおかしいぞー』

明らかな嘲笑が教室に満ちる。

(……駄目だ)

狂っているのは俺で、正しいのはやっぱりこの世界で。

「……くそつ、イカれてやがる!」

俺は耐えられずに教室を飛び出す。

立華が俺の名を呼んだ気がしたが、当然振り向きはしなかった。
もう遠くへと行きたい、こんな狂った世界でなく、遠くへ。

いつから、いつからこんな風になってしまったのか。

校内を走りながら考える。

『この世界の秘密を教えてやろうか?』

そう、明らかにあの男に出会ってからだ。

しかし後日その男に会ったら俺のことなんて知らないし会ったこともないの一点張りだった。

それどころか俺は男との会話をよく覚えていない、奴が何を俺に

言ったのか記憶が曖昧なのだ。

『この世界は——の世界なんだ』

なんだ、思いだせない……。

『僕はずっと待ってる人がいたんだ、でも』

そうか、確かあの日は出会った男に変な場所につれていかれて

「……って、うおお！？」

階段の手前でつんのめる。やばいこれは落ちる、なんて考える間もなく体だけは意志に反して宙を舞う。

「う、うおおおお……っ」

伸ばした手はただ空をつかんだ。

『この世界はプログラミングで成り立っている。ちょうどいい、君には実験体になってもらうよ』

……思い出した。

だけど俺の意識は完全に途絶され、ただ闇に落ちていくような、そんな感覚だけが確かにあった。

Episode 1 『leader』（前書き）

前回の部分を若干編集しました

Episode 1 『leader』

彼女を初めて見たのは教室の隅っこで。
あの日もやっぱり彼女は怒っていた。

Episode 1 『leader』

「……………」

全身が、特に頭がいてえ。

目に入った天井が異様に高いことから、俺は床に寝ているということに気がつく。

「どこだ、ここ」

見まわした感じは学校の様だが、ここがどこであるのか、それどころか自分が何故こんなところに居るのかすら思い出せない。
一体これはどういうことなのだろうか。

「あら、目が覚めた？」

「……………」

頭上から女の声。

どうやら人が立っていたらしい、全く気がつかなかった。
声の発信源に目を向けようとして、

「……………」

視界に広がるそれは……………パンツ。

「ぶふっ」

「どうしたの？ 気分がまだ悪いかしら？」

「い、いや、気分は最高です」

「は？」

「あ、いや」

いくらなんでも見ず知らずの女の下着を本人が気づかないのをいいことに見続けるのは気が引けた。

だから俺は立ちあがる、うん、今俺紳士になったよ。

名残惜しい？ いやいや何のことを言っているのだね。

目の合った彼女は良く見ると、いや良く見なくても美少女だった。少し勝気な目元と、頭に付けた力チューシャが凛々しい。

俺はもう少しだけ寝ていても良かったのではないかなんて後悔しつつ、今の自分の状況がそれどころではないということを思い出した。

「なあ、あん——」

「ねえ、あなた、目覚めてすぐで悪いんだけど、入隊してくれないかしら？」

「……は？」

俺の声を遮った彼女の口からわけのわからない単語が発せられた。

正直なんと言ったのか理解できない。

「……にゅ、入山！？ 俺に坊主になれと！？」

「入隊！」

「にゅ、入籍？ いやいやちょっと待て、俺はあんたの名前ですら……」

「にゅ う たい！」

「わかった、入浴か！ よし、よろこんガッ」

顔に肌色で堅くて拳の様な何かがめり込んだ。

「入隊って、なんだ？」

さすがに次は無い様な気がして痛む鼻を押さえながら彼女に問う。

「ここに来たってことはあなたの人生も決して素晴らしいものとは言えなかったと思うわ。」

そんな人生を強い神が憎いでしょう？ だからあたし達と共に戦いましょう！ 簡単に言うとも、そう言うことね」

「……………」

まるで話が噛み合わなかった。

2000歩くらい譲ってやってもそれが『入隊』の説明になっているとも思えなかった。

何が『ま、そう言うことね』だ、どういうことだ。

「悪いがなんの話をしているかさっぱり理解できなかった。神とか人生とかなんだ？」

宗教の勧誘だったら余所でやってほしいんだが」

「あー、もう！ 理解力無いわねえ」

「……………」

一方的に訳のわからないことを言った拳句逆ギレではこちらも力チンとくる。

苛立ったように髪をかきあげる彼女の仕草は美しかったが、それはそれ、これはこれ。

「今ので理解しろ！？ 無理に決まってるだろ！

自分の言葉不足を俺のせいかな？ 大体おまえ誰なんだよ！ つーかどこだよここ？」

あれか、おまえ俺を『入隊』させるために拉致でもしたのか！？

神とかわけわかんねえこと言う前にもっとちゃんと説明してみせろ

よ、なあ、おい！」

「ちょ、ちよつと落ち着きなさいよっ！」

「お、落ち着いてられるかよ」

「もしかしてあなた、何も覚えてないの？」

「覚えてる？ 何の話だ？」

覚えているか否かの二択で訊かれたら後者だ。

そもそも何を覚えていないのかすら覚えていない。

「はあまたなの……厄介ね。 いい？ ここに居るってことは、

あなた……死んだのよ」

「は？」

時が止まった気がした。

「大事なことからもう一度言うわよ、あなた、死んだの」

今度は、とぼける余裕はなかった。

……死んだ、俺が？

これは彼女のギャグか？ 見ず知らずの女にもしかしてからかわれているというのか？

「死んだって、生きてるじゃないか。 ははは、何言ってるんだよ」
そうだ俺はまだ生きている。

心臓は鼓動しているし見たところ足も生えているから幽霊ではない。
い。

俺の力無い笑いをどうとつたのかは知らないが、彼女は目を細めて嘘じゃないわと言う。

「ここは死後の世界。 あたし達はすでに死んだ人間よ」

「死後の、世界……」

なるほど、だったら死んだショックで何も覚えていなくてもおか

しくないって話か。

つじつまが合うじゃないか、つまりここは天国ってやつか。

来世は何になるのかな、出来れば人間がいいけど、私は貝になりたいなんて――

「なるかつ！　いきなり死後の世界って言われてあーはいはいそうですかわかりましたなんて言えるの思ってたんのかよ！？」

それともあれか？　3日後生き返んのかよ、マジで宗教の勧誘か！？　ええ？

ふざけるのもいい加減にしろよ、だったらせめて証明くらいはしてみろって……つつ」

突如右手に鋭い痛みが走った。

驚いて見てみるとぱっくりと割れた右手の甲から留めなく血が溢れ始めている。

しばしの混乱の後、彼女が手にしていたナイフがつけた傷だとすぐにわかった。

「うつぐああつ、て、てめえ何すんだこの野郎っ！！」

思わず無事な手で彼女の肩に掴みかかる。

一瞬殴りそうにもなってしまったが、さすがに女を殴るのは気が引けた。

自分は案外冷静なのかもしれない。

「ごめんごめん、痛い？」

「な、何を平気なツラで……いてえに決まってるだろ！？　あれか？　死後の世界だから痛みは感じませんってことをいいたかったのか？　残念だな、クソいてえよ、あーどうしてくれんだこの傷はよ！」

そう言っている間にも流れ出す血液が廊下を赤に染めていく。怒鳴ってでもないないと蹲ってしまいそうな程の痛みだった。

「あんた」

「あ？」

「ちよっと、うつさい！ 何なのよさっきから声はでかいし唾は飛ばすし、ぎゃーぎゃー怒ってばかりで少しは人の話を聞きなさいよ！」

「こっちのセリフだ！」

「うるっさい、顔近い！」

「ぐふっ」

今度は張り手か。この暴力女は一体何だと言うのだ。

「はあ、いい？ 一から説明するわよ。それでもわからないんだったらクビよ、クビ。あ、あとその傷は明日には直るわ」

入ってもない内からクビ宣言されました。

それと傷のことをもっと丁寧に謝って欲しかった……などという意見は聞きいれられないだろう。

「ここは死後の世界。あたしとあなただけでなく他にも人はいるわ、もちろん皆死んでるけどね。

ここでは誰も死なないし病まない、けどわかっているとと思うけど怪我はするし痛みはあるわ。

ただすぐに治るってだけの話。

あたしはゆり、死んだ世界戦線のリーダー。

死んだ世界戦線ってのはこの世界にいる神に反逆する組織、言わばこの世界の最前線ね。

そして今その戦線にあなたを誘っている、拒否権はないと思った方がいいわ。

以上、わかってくれたかしら？」

「……………」
先程よりはわかりやすかった。
しかしこのゆりと名乗った少女の言葉よりして確かにわかったことは――。

無茶苦茶であることだ。

もちろん彼女の言っていることがだ。

しかし仮に彼女の言っていることが全て事実でも、やはり無茶苦茶なことに変わりはないかった。

「ま、最初は混乱するのも無理ないわ、記憶のない人間ならなおさらね」

「俺は……記憶がないのか？」

「自分で言ってたじゃないの。死んだ時のこと覚えていないんですよ？」

「あ、ああ」

死んだ時どころか自分についての一切を思い出せない。

名前は……名前は。

わけのわからない空間に、自分と言う不確実な人間が不自然に存在している、そんな感覚。

そうとは思えず、今更になって恐怖を感じた。

「一時的なものよ。よくあることだから心配しなくてもいいわ」

「……………」

そう俺の顔を見つめてくれた彼女が嘘を言っているようには思えなかった。

これは俺の思い込みだろうけど、ゆりが少しだけ柔らかな物腰で言ってくれたのは、俺が一瞬だけ恐怖を感じたことを察してくれた

からじゃないだろうか。
多分、勝手な妄想だ。

「つまり」

次第に冷静さを取り戻しつつあった。

「おまえは俺をその、『戦線』とやらに入れたいんだな？」

「ええ、そうよ」

「神に反逆と言っていたが、具体的には何をするんだ？」

「天使と戦っているわ」

「……天使？」

もうどんな単語が出てきても大凡は予想がつくと言っか、驚く気になれなかった。

数分で耐性がつくとは恐ろしい。

「ええ、神の使いは昔から天使って相場は決まってるでしょ」

「どんな相場だよ」

だが確かにそうだ。

「それはいるのか？」

「いるわよ」

さすが死後の世界。

しかし天使がいると言うことは地獄ではないのか、それは良かったなんて安心している場合じゃなく。

「あたし達は日夜天使と戦ってる、もちろん神との対面を目指してよ。訊きたいことは他にない？」

「……………」

あるかないかで訊かれればそりゃ山ほどある。

しかし俺が第一に訊きたかったことは大体解決してしまったようだった。

「ないな、今は」

後気になるのはせいぜい彼女のスリーサイズくらいだ。
それもまあ後々で良いだろう。

「理解してくれたようにね。じゃ、もう一度訊くわ。入
隊してくれないかしら？」

死後の世界で神に反逆、天使との戦闘。
なかなかファンタジックで面白そうじゃないか。

「だが断る」

しかし俺は差し込まれた彼女の手で己の手を近づけながらも、中
指で彼女の手のひらを弾いて見せた。

「は……な、なんでよ!？」

案の定ゆりは驚きながらも怒りをあらわにしている。

「だいたいあなたには拒否権なんてないのよ？」

「俺は、神を恨む気持ちなんてねえよ」

「え？」

「言った通り俺は何も覚えてねえ、自分のことで精一杯だ。

神を恨んでねえ奴が戦っても仕方ねえだろうし、戦意無き戦いに勝
利はあり得ない。

そんな俺がいても役にたたねえだろう？」

「……………」

「そういうことだ。悪いな、力にはなれそうもねえよ。じゃあな」

最後はちょっと格好をつけてみた。

実のところ手の傷が痛くてもう堪らないのだ。

「待ちなさいよ！」

「まだ駄目か!？」

この鬼畜女めが。

「記憶が無い？ 神を恨む気持ちが無い？ 関係ないわよそんなの！」

「ねえのかよ!？」

「記憶がない子なら他にもいるわ！ そもそもあたしと戦線を立ちあげた人がそんなに神を恨んでなんかいないわよ！」

おいおいそんなに大丈夫なのかよ。

もしかしたらこの『戦線』とやらは酷い人不足に悩まされているのかもしれない。

故に勧誘がしつたかめつたかな状態なのだろうか。

「でも、関係ないわ！ ここに居るってこと自体もう——」

「もう、なんだ？」

「いいえ、とにかく、あたし達はあなたの味方よ！」

「……………」

「だから共に戦いましょう！」

「……………」

「……………」

「……ってそれじゃあ最初と一緒にじゃねえか!!!! うおっ、血が……！」

興奮したらさらに血が吹き出てきた。

彼女は随分上手い文句でまとめたつもりかもしれないが、全然まとまっていない。

寧ろ戦線とやらのいい加減さを垣間見ただけな気がする。
そしていきなりナイフで切りつけた人間を仲間だと思っただけ俺は頭がいかれてはいない。

「拒否権はないっていったじゃない」

「おまえ、そこまでして……もしかして、俺に惚れたのか？」

「……………」

ゆりは、すぐにこやかに笑った。

ペアアンツ

……張り手かよ。

「少し時間をくれないか？」

さすがに來たばかり（？）で何も理解できていないのだ。

さらに痛む右手や左頬が俺の思考能力を奪っていく。

そしてこのまま流されるままゆりの言う『戦線』に入ってしまった
ていいのかという疑問もあった。

「いいわよ、一晩ね」

「早っ」

既に辺りは暗くなり始め、今日もあと数時間で終わる。

考える時間が果たしてあと何時間あるというのか。

「だって早くしないと、気づいたら消えてたなんて困るもの」

「はは、消えるってなんだよそれ」

「……………」

ゆりは笑わなかった。

「とにかく一晩考えて入隊してくれるようなら明日、校長室にきて頂戴」

「校長室？」

「あたし達の作戦本部よ」

「こりやまた大げさなことで」

「じゃ、あなたが来ることを期待してるわ」

するとゆりはあっさりと簡単なあいさつを残すとスカートを翻し去っていった。

「……………」

思い返せば全て夢だったのではないかというような時間だった。何を言われたのかも正直よく覚えていない。

思い出せるのは彼女のパンツくらいだろうか……ってそれ本当に序盤じゃねーか。

後に残ったのは春の様な生ぬるい夜風と、

「ぬ、う、い、いでででえええ、わ、わすれてたあああ！」

ゆりによって切られた右手の痛みだけだった。

……とりあえず保健室を探そう。

ふと見上げた薄く紺色になりかけた空には、満月が浮かび始めていた。

あの月はどこから来たのだろうか。

あの山の端の向こうには何があるというのか。

今はまだ、何もわからないままだ。

Episode 2 『Angel』

実に疲れた1日だった。
そのせいだろうか、夢は見なかった。

Episode 2 『Angel』

「……マジかよ」

目覚めてみると昨夜ゆりが言っていたように右手の傷は跡形もなく消えていた。

痛みすらない。

これにて昨日の話がかなり信憑性を帯びたため、俺は現時点で一着しかない服（制服）に身をつつみ部屋を後にする。

無論、校長室へと向かうためだ。

何だかんだいいつもこのままでは何をしたらいいのかもわからないため、俺はもう一度彼女と話をすることに決めたのだった。

まあ、容姿が可愛かったからというのも多少理由に入っている……
かもしれないな。

昨夜、保健室を探していたところ教師らしき人間に見つかり、俺は寮へと強制送還された。

最初は自分の部屋があるとは思えなかったが、寮長に訪ねたところそれはあっさり見つかった。

「自分の部屋何番つすかね？」と訊いた俺を不審な目で見ながらも、部屋まで案内してくれた寮長に感謝すべきだろう。

とまあ社会的地位をやや危うくしながら『自室』に入ると、そこにはまるで誰かが今まで住んでいたような生活臭が溢れていた。これも『神様』が用意したジオラマ的なものかもしれないが、俺はありがたくその部屋を使わせてもらうことになったのだ。

長い付き合いになるかも知れない部屋だ、汚いという文句を言うのは止めておいた。

何となくだが、俺自身片づけが出来る人間には思えなかったというものがある。

寮長の慣れ慣れしい態度、あらかじめ用意されている部屋。様々なものに疑問を抱きながら昨日は寝た。

そうして朝起きてみると全てが夢で——なんてご都合主義は起きてはくれなかった。

記憶というものもまあ取り戻せているようには思えなかった。ただ一つだけわかったものがある。

名前だ。

部屋の表札を始め、室内に散らばっていたノート類、制服に入っていた生徒手帳にもすべて同じ名前が記されていた。

それが俺の本名であるかは定かでないが、しばらくはその名前を名乗ることに決めたのだった。

「……………」

さて、迷子だ。

当たり前と言えば当たり前か。

俺はこの学校の内部を全く把握していないし、そもそもこの学校

は広過ぎる。

このままふらふらとした歩きを続けていたら1日が終わってしまう気がして、俺は、

「な、なああんた」

「……………」

前に歩いていった女生徒に声をかけた。　　が、華麗にスルーされる。

「あー、おい。そこの可愛いお嬢さん」

……………って何を言っているんだ俺は。

後ろ姿の可愛らし気な女の子の肩を叩く。

これで振り向いたら超のつくほどブサイクであつたらどう逃げ出そうかと考えたりもしたが、

「……………なに？」

「ほっ」

それは杞憂に終わり、ゆっくりと振り返った彼女は期待通りの線の細い美少女だった。

むしろ期待通り過ぎて期待はずれだと言うほどだ。

「どうしたの？」

抑揚のない声で彼女が俺の方をじつと見てくる。

「あー、いや、えと、悪いんだけど、校長室、教えてくれないか？」

その何も考えていない様な、しかし真っ直ぐな視線に耐えられず俺はしどろもどろになりながら答えた。

「…………？」

「あ、ああ！ あのだな、この学校広くてさ、ははは、迷子つつか……」

いくらなんでも在校生（ということになっているのだと思う）が校内で迷子というのは無理があっただろうか。

「……いいわ、ついて来て」

しかし彼女は俺のそんな発言も気にせず、小さく頷くと歩きだした。

深く追求されたらどうしようかと思っていた分安心させられる。

背丈は俺よりもずっと低くて歩幅は小さいが、しっかりとした足取りは俺よりも随分と頼もしいものであった。

歩く度に左右に揺れる長い髪に目を奪われながらアホのように彼女の背を追うこと数分。

「こっちは教室棟、あっちが教師棟。だから校長室はあっちの2階よ」

渡り廊下で立ち止まって彼女が向かい側の建物を指差した。

なるほど、どうやらこの学校はそうにわかれているようで、そりゃどんなに探しても教室棟に校長室は無いわけだ。

「サンキュ、助かった」

軽い謝辞だけをして渡り廊下を歩きだす。

うむ、それにしても可愛い子だった。

広い学校であるからもう会うことはないだろうが俺のフォルダ（何の？）に保存しておこう。

どこか神秘性溢れる容姿と、道案内の恩人であることからフォルダ名は俺の天使ちゃんっと。

それにしてもこんな優しい子もいると言っのに初対面でナイフを

振りかざした某女ときたら……名前なんだっけ？

バラ？ ひまわり？ いや、違うな、パンジー？

「ところで海北君……授業、もう始まるのだけど」

ヒヤシンス！ ムスカリ！ チューリップ！ってもうそれ名前じやねーよ。

授業？ いや、そんなこといきなり言われても俺——って、

「え？」

彼女の口から発せられるはずもないその単語に俺は振り返る。

「お、おま、今なんて」

慌てて引き返すと彼女の所へと戻る。

「授業、もう始まるのだけど」

「いやいやそれはわかったから、その前だよ、前！」

「こっちは教室棟、あっちが教師棟。だから校長室はあっちの——」

「違うっちゅーねん！ ってほら見ろ、売れない芸人みたいなことになっちまった」

「なんでやねん」

「おうっ、なんで俺つつこまれてんだ？」

すごくノリの無いツツコミをされ、ご丁寧に胸まで叩かれた。しかも一人ご満悦状態で意味がわからない。

「そうじゃなくて、今おまえ俺の名前呼んだろ？」

「……………？」

「呼んだんだよ！」

ボケつと小首をかしげていた彼女は俺の声に、ああそう言えば……
…とても言いたげな顔をした。

天然、というやつなのだろうか。

「なんで知ってんだよ!？」

この短い距離で俺は彼女に自分の名前を教えた覚えはないし、名前が一見してわかりそうなものを身につけてはもちろんない。

「なんでって……クラスメイトじゃない」

「は？」

「クラスメイトだから、名前を覚えているのは当たり前」

「え……えええええ!？」

情けない声が思わず口から洩れた。

俺の耳が正常ならクラスメイトと聞いたのだが。

「お、俺達クラスメイトなの、か？」

「おかしいことを訊くのね、そうよ」

「えっと、いつ頃から」

「……時間の概念はこの世界にないからわからないけれど、ずっと前から」

さいですか。

これはまたおかしいことになってしまった。

あのチューリップ女……じゃない、ゆり曰く俺は昨日この世界にやってきたはずであると言うのに、目の前の彼女はずっと前から俺とクラスメイトをやっていると言う。

昨日に続き早速頭が混乱し始めたが、何も思い出せない俺はどちらが本当であるかなんてことは当然わかるはずもない。

「用……」

頭がミックスモードになっている中小さな呟き声が耳に入る、もちろん名も知らぬ天使ちゃんが発したものだ。

「あ？」

「用があるなら早く済ませないと、授業が」

授業どころではないのだが……そんな本音を飲みこみつつ、愛想笑いをしてみる。

「授業な。後からいくから先に行っていてくれないか」

「そう？」

「ああ、用事を済ませたら次の授業は必ず出るから」

「わかったわ」

なんだろう、このなんとかフラグなるものを立ててしまった予感のようなものは。

我ながら嘘臭さ満点ではあったが、彼女は納得した用で踵を返して廊下を歩いて行った。

……強ち嘘はついていない。

ゆりと話をつけたら授業にも一度顔を出して見る気にもなっていた。た。

言うまでも無く、彼女にもう一度会いたいと言う下心が8割方を占めているのだけれど。

自分のクラスを訊き忘れてしまったということに気がついたのは、俺が階段を上がり校長室の前についた時であった。

まあ、何とかなるだろう。

「……………」

作戦本部という割にはそこは普通の門がまえであった。

もつと大それたものを想像していた分拍子抜けをする。

とはいえ『あの』ゆりの仲間であり、いきなりナイフを振りかざす女がリーダーをやっている組織だ、気が抜けるはずがない。

いきなり斬殺、銃殺、絞殺くらいは覚悟しなくてはならないのだろうか。

そんな不安を胸にドアノブを握る。

「よし、まずは明るくあいさつ、フレンドリーフレンドリーコインランドリー」

そのままドアを……………開けた。

「皆さん初めまして！ エントリーナンバー125番海北！ 特技はリアルゴリラああああアア！?!?!」

突如迫りくる黒い塊。

あれは多分——ハンマー。

……………撲殺、だと？

俺の呟きはガラスの碎ける音にかき消され、そして同時に俺の意識もブラックアウト。

どうやら俺はとんでもない世界に足を踏み入れてしまったらしい。

Episode 3 『theme of sss』？

彼らの目的はただ一つ。

自らの人生に理不尽を強いた、神への反逆――

Episode 3

『theme of sss』？

「うつ……」

全身が痛い。と思ったけれどそうでもなかった。

先程の出来事は一体何だったのかと疑問に思いながら瞼を開いて、

「ぶふうっ」

視界に広がるのは…… またもパンツ。

第三話にて既に天井とは先が思いやられるが、2日連続で女の子の下着をお目に出来るとは生きていて良かったの気分だ。

いや、既に死んでいるらしいが。

「あ、おいゆり、起きたみたいだぞ」

「あら本当ね」

頭上から聞き覚えのある声が響くが、ゆりのものであるう。

ということは今俺の前に堂々とたっているのはゆりで、このパンツもまた彼女のものであるということになる。

寝ている人間の頭上に起つのは如何なものかと言ってやるべきなのだろうか。

「なあ、どうでもいいけどよゆりっぺ」

初めて聞くどこか軽そうな男の声。

「その位置に立ってるって新人からパンツ見えてるとおもふべえっ！」

「ぐぎやあつああああーっ」

考える間もなく左目の中に長細いものが侵入してきた。……どう考えても指だそうとしか考えられない。

「いてえええ！」

左目が疼くなどと悠長なことも言ってる場合でなく飛び起きると、正面には不機嫌そうなゆりが仁王立ちしていた。

壁の方で顔を押さえてしゃがみ込んでいる男は先程ゆりに余計な進言をした奴だろうか。

……まったく余計なことをしてくれたものだ。

よく見ればその男以外にも予想以上の多くの人が校長室にはひしめき合っていた。

「何すんだよいてえなっ」

「げえ、第二間接までいったわ」

「やった本人が驚くなよ！ 失明もんだぞこれ」

まだ目の前が赤黒くちかちかしているが、とりあえず視力は奪われていない模様。

「あなたが不埒なことを考えてるからよ」

「考えてねえよ！ 勝手に見せといてこりゃねえぜ。」

だいたいさっきのは何だったんだよ！？ ドア開けるなり変なもんぶっ飛ばしやがって……あれがおまえらなりの歓迎か！？ 嬉しくないね、全然」

現在唯一の顔見知りであるゆりにありつたけの不満をぶつける。

もしこれが本当に出迎えとしたら今度こそ入隊を考え直さなければいけない。

「違うわよ。ちょっとトラップが発動しただけよ」

「ちよつと……？ だけ？」

どう考えてもあれは一回死んだレベルだったのだから、さらにトラップという非日常語に慄く。

「よく生きてたな、俺！」

「あら、さすがに一度死んだわよ。ね、松下君」

「む、残念なことになってたな」

そういえばそういう世界だった。

松下と呼ばれた大柄な男子が頷く。体格的に見ても彼が飛んでいった俺をここまで運んでくれたようだ。

「それにしても残念ってなんだよ……まあいい、で、あれは毎回飛んでくるのか？ おまえらはDM集団か？」

「ちっがうわよ！ 合言葉があるのよ。それを言えはいだけよ」

「じゃあなんで昨日教えてくれなかったんだよ！？ 最悪な出迎えしやがって」

「まあまあ落ち着けって」

ソファから立ち上がりゆりに詰め寄ろうとしたところを後ろから止められる。

恐らく声的に先程パンツのことを指摘した野郎だ。

「合言葉は戦線メンバーにしか教えられねえからな、昨日の時点じゃ教えられなかったんだよ。」

ま、ゆりっぺが単純に忘れたただけだろうけどな」

「一言余計よ、日向君」

わずかながらの弁明を聞いているうちに熱も冷めてきたので、ゆりを始めとする『戦線メンバー』を一人一人に一瞥をくれる。

パツと見だがどう見ても男子が多い。どれはもう大量だ、男祭りだ。

「おげっ」

「どうしたのよ？」

「俺のセンサーが異常反応を……いや。とにかく俺は言われた通りここに来た。」

おまえらのことを完全に信用したわけじゃねえけど、一人でいても何していいかわかんねえし、この世界についても聞きたいことがある。

戦力になるかはわからんがしばらく行動を共にさせて欲しい。前置きはこんな感じでいいか？」

室内を見回しながらそう告げる。

正直最初の一件で考え直そうとも思ったが、乗りかかった船というべきか、ここまで来て帰るのもどうもしまりが悪い気がした。

俺の言葉にあからさまな嫌悪を見せる人もいないようなので、多分掴みは間違っていないと自己評価する。

ゆりも少し口角を上げ、勝ち誇った顔でわかったわと頷いた。

「今日からあなたも死んだ世界戦線の一員よ」

「死んだ、世界戦線？」

どこか間の抜けた名前だ。

組織名と言ったところか。

「ええ。死んでたまるか戦線、絶対絶命戦線、走馬灯戦線、フジツボ戦線、ライト兄弟etc……さまざまに変わりながらやっぱ初心が大事ってことで戻ったわ。」

また変わるかもしれないけど今は死んだ世界戦線、クラスSSSよ」

「……はあ」

後半の明らかなおかしなものにツツコミを入れるべきか悩んで止めた。

多分こいつらにとってこんなことは序の口だ、何故かそう確信したのだ。

「じゃ、まず自己紹介ね。あ、そうあなた、名前くらいは思い出

したかしら？」

「ああ生徒手帳に書いてあった」

「生徒手帳？今はそんなのも入ってるの？ 時代は変わったわね」
いや、おまえいつからここに居るんだよ。

「本名かはわからんが海北だ」

「海北君ね。多分本名よ。まあ偽名だろうと構いはしないけど。
じゃこちらから、あたしは昨日したから割愛……まず、彼が音無君」

そういうとゆりは一番近くにいた男を指した。

「新参だけど現時点で戦線きつての常識人よ」

大丈夫かここ。

少し赤みがかった髪にゆりの紹介も納得してしまう真面目そうな顔つき。

「ははっ、ゆりたちがおかし過ぎるだけだろ。 おまえも記憶、
ないんだってな。俺もだよ。」

最近来たばかりだし、まあよろしくな」

「お、おう、生前はさぞモテただろうな」

さっそくの自己紹介で焦ってわけわからないことを口走ってしまった！

しかし音無はそんな俺の言葉を否定しながら嫌味でない苦笑を浮かべていた。

……記憶無いのに否定すんなよ。

「それで彼が日向君。ちゃらんぼらんどやる時はやるわ」

「おう！ よろしくな…… ってそれ音無が来た時の紹介とまんま
一緒じゃねえか！」

さっき俺を止めに入った奴だった。

「曰くまだ本気を出してないだけだそうよ」

「何その三下台詞！？」

「最高にかっこわるいな、おまえ」

「音無もノってくるなよ！」

少し長い髪を振り乱しながら必死で二人に食ってかかっている。
言動は紹介の通り軽そうな奴だがどこか付き合いやすそうな雰囲気
気があった。

「ところで海北」

「ん？ なんだ？」

「さつき何色だった？」

「……………白」

『ぐほおあぁっ』

……………うん、仲良くなれそうだ。

「……………あさはかなり」

「つたく、しょうもないわね。はい次、大山君」

「え、えつと。よろしくね」

「おいおい、文面だけみたら男か女かもわからねえ」

「え？」

「いや、何でもない」

何の捻りもねじれもないあいさつをした女顔の男大山。

濃い味揃いの中ではやや突出した何かが欠けるが、逆にそういう
存在も大事なのだろう。

「で、彼がフジツボ君」

「へへ、覚悟しろよボウズ」

何をだ？ それよりもつつこむべきは名前だろう。

しかし長ドスをもったどこぞの組員のような風貌をした彼に似た
人物をどこかで見たことあるような無い様な……………。

「おい待てよゆりっぺ！ 今俺の名前全然ちがったじゃねえか

！」

「あら？ ちゃんと藤沢君っていったつもりだったけど」

「それすらちげえし」

で、結局本名はなんなのだろう。

「いいじゃないの。はいはい次、TK、ノーコメント」

「Oh, Let's dancing! jump and
hoot!」

「は？」

金髪にピアス、目元を赤いバンダナで覆った男が躍り出す。

どうやら外人さんもいるらしい、この組織は。

「えっと……ナイスとーみーとーゆー、まよねーずいずカイホ
ク」

「因みにTKは英語はてんでダメよ」

「なんだよ！ 早く言えよ！」

「それにしてもすごい日本人英語だったな」

「ほっとけよ!？」

音無の奴、頭良さそうな顔してるからって人のことを笑いやがっ
て……。

そうして俺の英語能力の低さが露呈しただけの紹介となった。

「あさはかなり」

……誰だ今の失礼な一言は。

「それで次、彼が松下君、肉うどんよ」

「え？」

なんだそれは。肉……？

「ちよつとストップストップ！」

俺が疑問を口にする前に日向が止めに入る。

「なによ」

「いくらなんでもさつきからテキトー過ぎんだろ」

「もう面倒なのよね」

「だからって、あと数人じゃねえか。つーかゆりっぺは別に大した
たことしてないだろ」

「はいはいわかったわよ、やりやいいんでしょやりやー」

明らかにだるそうな態度でゆりが続けるが、こんなんで大丈夫なのだろうか。

「えつと松下君ね。柔道五段だから敬意をこめて松下五段と呼んでいるわ」

「おお、すげえな、よろしく」

「うむ、よろしくな」

俺よりも一回り程大きく分厚い手を握りしめる。

「まあ柔道は五段じゃないんだがな」

「え？」

最後のカミングアウトはあえてスルーを決め込むのだった。

「それでそのメガネの彼が高松君」

「よろしく願いします」

「おう」

長身の高松と呼ばれた男子が知的そうにメガネを持ち上げる。

その行為自体は如何にもインテリな彼にぴったりであったが、

「因みにただの馬鹿よ」

ゆりの一言が色々と台無しにしていた。

「それで、壁のところであさはかなりを連発しているのが椎名さん」

「女子キターーーー!」

思わず本日初の女子の紹介（ゆり除く）に感きわまる俺。

周りが若干引いていた気がしないでもないが、この感動に比べれば大したこと無い。

「ちよつと落ち着きなさいよ。あと椎名さんは基本これしか言わないわ」

「あさはかなり」

「よろしくなり！」

しかしこれではコミュニケーションの類は難しいのではないかと思う。

よくこのメンバーの仲間になれたもの内心感心している俺を余所に、彼女はもう一度あさはかなりと呟くのだった。

「そして最後が岩沢さん」

ソファに腰掛けてギターを背負ったセミロングの彼女が手を差し出してきた。

「おお、好意的！ よろしくな」

「ん」

が、しかし握手を交わしたのはいいがその後の反応は希薄だ。もっとうっそうと色々あるだろうに……照れるとか笑うとか抱きしめるとかキスするとか。

外国じゃ当たり前だぞ、多分。

「好きな食べ物は何？」

「……うどん」

試しにお見合いのようなことをやってみたがやはり反応は薄かった。

所謂クールビューティーという奴だろうか。

これ以上やらかすとゆりがつるさそうな気がしたので、渋々岩沢の手を離すと少しだけ後ろに下がった。

「まあだいたいこんなところよ。他にも戦線メンバーは沢山いるけど、出会ったところで紹介なりなんなりしてくれればいいわ。

無理に仲良くしろとは言わないけど、戦線内でもめ事は起こさないように、以上」

「へいへい」

ゆりに相槌（スルーに近いが）を打ちながら室内を再び見回す。
既に名前がおぼろげな奴が何人かいるが、そのうち嫌でも覚える
だろう。

それにしても――

「個性が強いな」

思わずありきたりだが思った通りの言葉が漏れた。

「アホは個性が強いのかしらね」

かく言うおまえはアホのリーダーだがいいのか、というと眉をひそめ睨まれる。

「俺も個性を出してかないとな」

あいにく記憶が無いもので自分という人間がどんな性格をしているのか何もわからない。

この機会に死後の世界デビューをするもの悪くないのではないかなんて不謹慎極まったことも考えてみたりする。

「個性が無いのは僕の個性だから譲れないよ！」

そして何故か自身ありげな大山が食いついてきた。

「いや、無個性は俺には荷が重いかな」

「つーか大山それでいいのか」

本当にその通りである。音無のツツコミに密かに同意した。

「そ、そうだよな、ごめん。良い藤巻君みたいな顔してるから時々きり自分探しの旅に出ているのかと思って」

「あ？藤巻？誰だそれ」

「ひでえ！俺を忘れるとはどういうことだてめえ！つーか大山もわけかんねえこと言ってるじゃねえよ」

「ああ、フジツボ君か」

「だからちげえよ！ あー、ゆりつぺがちゃんと紹介しねえせいで俺の名前が全然浸透してねえじゃねえか」

「あたしのせいじゃないわよ」

ゆりは知らぬ存ぜぬな態度を貫き通す。

この三白眼に長ドスを持った男子、本名は藤巻と言らしい。

「というか誰か良い藤巻につっこめよ。なんだ？顔が似てるっつーことか？」

「ちけえよ！んな近づかなくなつて顔くらい見えるだろうが、クソっ」

「うお、ひでえな」

俺の顔を覗き込んできた日向をハエのように追い払う。

女子にならやられても構わないが、男子に顔を覗きこまれるなんて例え死んでもごめんだ。

「まあ確かに言われてみると似てるんじゃないか？」

「あ？何言つてんだよ音無。こいつの方がヘナヘナじゃねえか」
藤巻が手にしていた長ドスで俺を指す。

仮にも鞘に収まっているとはいえ刃物を人に突き付けるとはなんて野郎だろうか。

「ヘナヘナだと！？ 柔和と言え三下顔が！」

「んだとテメエ！」

「ちよつとうるさいわね、顔なんてどうでもいいじゃない」

『よくねえ！』

最初に藤巻を見た時に何となく思っていた事、恐らく三白眼という黒目の小ささが俺達の顔を少しだけ似せた作りになっているのだ。

そして大山が言ったように俺の方がややたれ目なので柔和さが増して『良い人』の演出が出来ているらしい。

間違つてもなよいだとかそういう訳ではなく。

所謂イケメンの類なら死後ライフも有意義なものになったかもしれないが、昨夜部屋に入って自分の顔を確認してみたらその可能性は打ち消された。

眉は下がっているのに目元だけは小さな黒目がキラキラと光るアンバランスな顔立ちは、自分の顔ながら情けなさを感じてしまうのだ。

しかも俺の目は左右下の三方が白目ではなく黒目が異様に下方に来て左右上が白目の三白眼になっていた。

「新入り貴様あああ!!」

「……………!?!」

そんな自身の顔に憂いていると、校長室のドアがけたたましく開き思考が中断された。

頭上で長物を振りまわした狼の様な男が何やら俺を睨んでいる。

「貴様、ゆりっぺのパンツを見たと言っつのは本当がっ……………」

パリーンという効果音が相応しいほど軽快に、男が例の巨大ハンマーで飛ばされていった。

登場からわずか数秒。

寒いギャグまで飛ばしておいて自分もあんな風だったのかと思うと穴を掘ってでも逃げたくなる。

それよりもパンツの件がもう外部に漏れているとは、この部屋は盗聴でもされているのではなからうか。

「で、今のは誰だ?」

「野田君よ。彼は戦線きつての——」

『アホ』

そうして俺は、SSSによる本日初めてのコンビネーションを見せつけられたのだった。

E p i s o d e 4 『 t h e m e o f s s s 』 ? (前書き)

タイプミス多くて済みません(; ^ ω ^)

Episode 4 『theme of s s s』 ?

t h e m e o f s s s

「はあ？ 授業に出たいですって？」

至近距離から言われているわけでもないのに鼓膜の振動が半端ではないゆりの声。

「だ、だめか？」

今の反応から答えなんてわかりきっているが、それでも一応尋ねる。

「あつたりまえでしょ！ 全くどういうことよ！？ そんなに勉強熱心にはみえないけど？」

俺の顔をじろじろと見まわすと随分的を得たことを言っつてゆりは溜め息をついた。

「つたく、授業に出たいなんてイカレタ野郎だぜ」

「俺なら頼まれても出ねーよ」

「僕もう授業なんて忘れちゃったよ」

ゆりの後ろでは吞気そうに藤巻、日向、大山が談笑にふけっている。

こいつらはどうやら長いこと授業を受けていないらしい。

「いや、なんだ、俺達はこの学校の生徒っつーことになっているみたいじゃねえか？」

「そうよ、一応ね」

「それでさつき自称クラスメイトの子に授業に出てくれって言われたんだよ」

「それで？」

「その子が可愛かったから授業に出ようと思う」

「ふざけるな！」

結構本気で言っていたのに見事なまでに一蹴される。

「とんでもない人ですね」

「そうだな。NPCに現をぬかして授業に出たいとは……」

高松や松下五段までもが同じ反応を取る。

正直学生であるはずの身で授業に出たいと言ったことになにか間違っているというのだろうか。

常識的に考えると俺の発言の方が正しいのだけど、そもそもここはそんな常識は通用しない場所だったのだと改めて思った。

「ところで今のNPCってなんだ？」

聞き慣れない単語に疑問が浮かぶ。

略称であるとは思うのだが、記憶も無いせいもあるのかすぐに何かを連想することが出来ない。

「ああ、NPCはノンプレイヤーキャラクター……言わばこの世界のあらかじめ用意されている人のことね」

「？」

ゆりの説明がいまいちピンとこない。

「それは俺達とどう違うんだ？」

「見た目じゃわからないけど、彼らはこの世界の仕組みには気づかない、生きている世界を体験していない人達よ。」

一応人格はあるけど、人間味に欠けているわ。

本当は一日も授業に出ていないあなたをクラスメイトと言ったってことはその彼女もNPCよ」

「ふーん、人間じゃないのか」

その説明で8割方理解出来た。

言われてみれば先程道案内をしてくれた彼女も、こいつらと比べ

ると口数や表情が少なかったことを思いだす。

あれが所謂人間味に欠けるということであるなら何となく納得せざるを得ない。

「ま、でもいつか。NPCって奴でも可愛かったし」

「あなたねえ！」

おっと、心の声が口に出ていたらしい。

ゆりが明らかに呆れた表情で俺を睨んでいる。

「なんだ？ 嫉妬か……いづう！？」

てつきり鉄拳が飛んでくると思っていて構えていた分、思いつきりかかとで足を踏まれたのは予想外で、そして痛かった。

それでも俺はマイエンジェル（道案内をしてくれた子）との約束を果たすため、授業に出ると言い張った。

「海北、そのNPCが可愛かったというのは良く理解出来た」

「おお、日向、わかってくれるか？」

日向が深く頷きながら俺の肩に手を置く。

やはりこう言うことには女よりも男の方が理解があるようだ。

「だがな、俺達戦線は授業に出ないのは絶対だぜ？ 消えちまったら元も子もねえからな」

「……消える？」

そう言えば昨日のゆりもそのようなことを口にしていた気がする。

「消えるって、どういう意味だ？」

「そのままの意味よ」

「この世界から消え失せちまうってことだぜ、新入り」

「簡単に言えば成仏みたいなものらしい」

ゆりに続き藤巻と音無が付け加えてくれる。

話の内容だけに本部内は少しだけ静まり返った。

「あたし達は模範的な行動をとることでこの世界から消滅してしまふのよ。」

絶対ってわけじゃないけど、そうなってしまった仲間が多いからあ

たしたちは授業に出ない、つまり模範的行動はさせているわ」

「……………」

存在の消滅。

それは死なないこの世界での死を意味しているのだと馬鹿な俺でもわかった。

きつと一度消えてしまったら戻ってくることは出来ないのだ、その後どうなるかなんてことはわからないとしても。

だからこそ彼らは無茶苦茶をしてここに居るのかもしれない。

sssとロゴがプリントされた制服を着ているのもきつと校則で定められたものでない彼らオリジナルの制服なのだろう。

そこまでして模範的生活を避けているのだ。

——この世界から消える。

不思議なことに何故だか俺はこのことに引っかかりを覚えた。

まだ何も知らない新入りであるはずなのに、俺はこの世界からの消滅があることを知っていたような、そんな感覚がしたのだ。

恐らく気のせいではあるだろうけれど。

「つまり授業にまともに出ちゃいけねえと……ま、とりあえず行ってくるわ」

しかし俺はそのことを不安がったりせず、軽く宣言してみせるのだ。

「はああ！？　ちよつとあたしの話聞いてなかったの？」

当然ゆりは激怒。周りの奴らも呆れている。

「聞いてたぜ。聞いてたが、あくまで真面目に受けなきゃいいんだろ？」

大丈夫、授業なんて聞きやしねえから消えねえよ」

「その油断が死を招く」

「……………」

あまりにシヤレにならない発言は壁のほうから聞えて来た。

椎名だ。あさはかなり以外の言葉も一応は言うことが出来るらしい。

「本当その通りですね。そう言っただけ授業を受けるフリをした人間が過去に何人も消えてしまったんですよ」

「マジが。まさに命がけの授業だな」

高松の述べたことは事実らしく、メンバーは首を縦に振りながら同調していた。

「けどよ、全員消えちゃったわけじゃねえだろ？」

「うん、まあね。僕は皆と出会う前は普通に学校通ってたし」

「お、おう。おまえは違和感なさそうだな」

大山が教科書を片手に教室内をフラフラしている様子があまりに容易に想像出来て思わず笑ってしまう。

逆にTKあたりがそうしていたと言っただけならそちらも違和感があり過ぎておかしいが。

「そんなわけだし1回くらいいいだろう？ 何も本気で受けるわけじゃねえ。」

それに約束しちゃったわけだしな」

「……わかったわよ。あなたが授業にでて満足するような人間にも見えないわ」

「女に囲まれて満足はしそうだがな」

表情は不機嫌そうであったが最後はあっさりと許可が下りた。そして松下五段、一言余計である。

「いいのか？」

「そこまで言うならね。あなたは記憶も無いし消えることはないわよ、多分」

「多分って」

「消えたら自己責任よ」

「へいへい」

その時には恐らく意志なんてものは存在してないだろうから苦になることも無いだろう。

「じゃ、行ってくるな、すぐ戻るわ」

「ええ。ちゃんと帰って来なさいよ」

「おう！…… ってなんだよお前ら、こんなことでマジな顔すんだよ」

妙に真面目腐った顔をされると、こちらまであれ？本当に俺消えちまうのか？と不安になってくる。

「いや……。短い間だったけど楽しかったぜ」

「ってそれ消えるの前提のあいさつじゃねえか！」

皆の気持ち（？）を代表した日向の頭を張り飛ばした。

どうでもいい余談になるが、この騒ぎの中岩沢はずっと何やら書いていたようだった。

よくわからないがとんでもない神経をしていることだけは理解した。

消えるかよ——。

俺は消えるわけなんてない。

根拠なんてものは無いけれど、どうしてか俺は確信していた。

Episode 5 『triangle』 ?

彼女は、孤独なのだと思う。

Episode 5

『triangle』 ?

「よう、天使ちゃん！」

「……私は天使なんかじゃないわ」

SSSの面々に見送られて俺は最初で最後（多分）の授業に参加しようとしていた。

自分のHRクラスであるというこの場に随分時間はかかったがなんとかたどり着いたのは数秒前。

「まあまあ、俺の中の天使ちゃんってことで。あ、俺の席どこ？」
「ここよ」

奇遇にも彼女の前の席が俺の指定席らしかった。

椅子に座って、当然みなれない教室を一瞥。

この数秒間でわかったことは、彼女より可愛い子はクラスにいないということくらいか。

そうこうしているうちに教師が入って来て、退屈な3時限の授業が開始された。

ここは割愛——というか寝てました。

「……うつ、じゅる」

まわりの騒がしさに目を覚ますと授業は終わり昼休みになっていた。

一応確認してみたが、身体が薄くなっていたりしないため無事だったということだろう。

さすがに寝てる間に消えてましたじゃシャレにもならん。

「なあ、俺と一緒に——」

後ろを向いて天使ちゃん（本名未だ不明）を昼飯にでも誘おうとしていたところ、

「海北」

隣の席の奴に呼びとめられて俺は振り返る。

「な、なんだ？」

「……誰だ？」

こいつは授業が始まるとやたら俺の方をちらちらと見てきて、まさかそちらの気があるのではないかと非常に恐ろしかった奴だ。

「あ、あのよ、昨日はあんな態度取っちゃまって悪かったな」

「は？」

昨日俺とおまえの間に何があったっていうんだ？

「ミナカミって奴のことはやっぱわかんねえけど、もつといい方あったよな」

「……………」

NPC恐ろしや。

普通に話は出来ると言うのに全くこいつとは出来る気がしない。

これ以上わけのわからんことを話されても対処に困るので、曖昧に笑って誤魔化しながら数歩引いた。

そしてそのまま回れ右をして、再び彼女に向き直ると、

「飯、一緒に食わないか？」

俺は死後ライフの第一歩を踏み出したのだった。

突如教室が騒然とする。

「おい、海北？ おまえ立花さんとそんなに仲良かったのかよ！？」

ってまたおまえか。

しゃしゃりでてくる隣の席のNPC（男）、おまえこそ俺とそんなに仲が良かったのかもしれない。と言ってやりたくなる。

「たちばな？ 誰だ？」

「いやいや、おまえ飯まで誘って何ボケてんだよ」

「あ、ああ、ああ、橘さんね。ジョークジョーク」

「いいえ、立花よ」

「文字に起こさなきゃわかんねえ訂正するなよ！？」

どうやら天使ちゃんこと彼女の本名は立花というらしい。

「これから仲良くなる予定だから。えっと、俺の方で奢るし学食行こうぜ？」

先程知ったことだがこの世界の学校には学食が用意されているらしい。

生前通っていた学校に学食が存在しなかった奴らは非常に喜んでいるとかいないとか……。

立花は数秒不思議そうに俺の方を見て、何を考えていたかはさっぱりだが表情を変えずに「いいわ」と頷くのだった。

「立花は何食う？」

券売機の前に佇む彼女の顔を覗く。

因みに俺の初学食メニューは天ぷらうどんとなった。

「値段とか気にしなくていいからな」

何故かポケットに入っていた財布には割と多めの金銭がつつこんであつたからだ。

「じゃあ……麻婆豆腐」

「マジか？ 昼からヘビーだな、胃もたれしねえ？」

「はい、大田胃散」

「サンキュ、って俺じゃなくておまえがだよ！？」

「……平気よ」

「そうか」

立花から手渡された胃腸薬はポケットに突っ込み、そのまま俺達は食券を昼飯に変えて空いている席へと着く。

「うつわ、おまえそれ食いものかよ……」

立花が手にしたお盆の上の麻婆豆腐は食べ物らしからぬ色をしていた。

どんな調味料を入れたらここまでの絵の具の様な赤が演出出来るか知りたいものだ。

「う、うまいのか？」

「ええ、うまいわ」

「マジか……」

けれども立花は相変わらずの無表情で、しかしどこか嬉しそうにそう答えるのだった。

「立花さ」

「なに？」

「誘つって何なんだが、いつも一緒に食ってる奴とかは大丈夫だったか？」

半ば強引に誘って来てしまったために、今更になって申し訳な
てくる。

もしかしたら俺の誘いがなかったらクラスの女子かなんかと一緒
に昼飯を食っていたのではないかと、食堂の喧騒を見て思ったのだ
った。

しかし。

「大丈夫」

「本当か？」

「……いつも一人で食べているから」

「そう、か」

気遣いは余計なものとなり、むしろ盛大な地雷を踏みつけた。

立花はそんな俺の発言をさして気にする様子も無く機械的に麻婆
を口へと運んでいた。

「……こんなに辛そうなのに汗一つかいていない。」

「なんか、逆に悪い」

「どうして謝るの？」

「い、いや……」

少しばかり変わった少女。

こいつはこうやっていつも一人で、飯を食うのだろうか。

この騒がしくて、笑顔と笑い声が溢れている空間で。

表情の無い顔の奥で、何を思いながら飯を食っているのだろうか。
そう考えると急に俺は、今日出会ったばかりの彼女に無性に手を
さし伸ばしたくなったのだった。

Episode 5 『triangle』 ?

「なあ立花」

うどんをすすする手を止めて顔を上げると、立花はあと数口で麻婆を食べ終わるところまで来ていた。
どうやら食べるのは早いらしい。

「もしよかったら、明日も俺と一緒に食わねえか？」

授業はもう出ることはないだろうが、学食なら嫌でも毎日訪れる。そうすれば昼の数十分間くらいは共に過ごすことが出来る。

この提案に理由なんてない。

これが見た目ゴリラやチンパンジーに毛の生えたようなブ女だったら同じ台詞を口にしていたかはわからない。

たまたま目の前に一人で飯を食っているという美少女がいたから、気まぐれに、勝手に誘っているだけなのかもしれない。

それでも一人は寂しいからなんて、俺は柄にもないことを考えていた。

……まあ、自分の人格もよくわからないのだけれど。

「はは、さすがにこんな男じゃ嫌か」

立花があまりに黙ったままなので気まずくなってどんぶりの中を箸でかき回した。

衣の取れた天ぷらの中身がぐるぐると泳ぐ。

うーん……嫌と言われたら格好悪いな。

「あなたが」

「？」

「あなたがそう——」

「海北君っ」

立花が何かをいい終わる前に、背中の方から俺を呼ぶ声が聞こえて、

「お？ おお、ゆりか、この子がさっき言ってた……ってうおお、何すんだよ!？」

「いいからちよつと」

問答無用で首元を掴まれて椅子から引きずり降ろされた。

「まてまて海老が落ちる、っておい馬鹿、ぎゃーっ、楽しみにしてた海老があああ」

箸から滑り落ちた海老天をキャッチしようにも失敗、そのまま股間に当たって一度跳ねた後机の下に転がっていった。

その海老のごとく俺も力なくゆりに引っ張られ、4つ離れたテーブルへとたどり着いた。

「おいゆり！俺の海老天返せよ!？ つーか何なんだよ……お？ おう、おまえら」

そこには様々なものを食っているSSSの連中。

どうやら校長室以外でもつるんでいるらしい。

無事だったぜ、と箸を持った片手を上げてみても皆の反応は微妙で、その理由を俺はすぐに知ることになる。

「ちよつと海北君、あなた何やってんのよ!」

「何って、飯食ってたんだが」

「んなもん見りゃわかるわよ！　なんで天使と食べてるかって訊いてるの」

「へ？」

天使？

確かに彼女は俺のMy Angelだが、あくまでそれは俺の中の認知である。

つまりゆりも彼女のことをそう呼んでいるということは――

「うん、おまえ見る目あるな」

「質問に答えろ！」

「な、何怒ってんだよ……」

「おいおい、ゆりっぺこいつ知らないんじゃないの？」

「さつき説明してないし知るわけないだろ」 日向と音無が横槍を入れる。

どうでもいいがA定食とB定食をお揃いで食べていた。本当にどうでもいいが。

「あさはかなり」

「あちゃーそうだった……ってあさはかじゃないわよ！ 海北君、彼女は天使よ」

「うん、そうだな、天使だ」

透き通った肌、光を放ちそうな銀髪、天使の様な可愛さ。

正直ただのNPCではないと俺も思い始めていたところだ。

「………って、あなた本当に理解してるわけ？ 彼女は、あたしたちの敵よ」

敵……敵？

頭の回転が一瞬鈍って、しかしすぐに正常に機能する。

思い返せば昨夜のゆりが言っていた、“戦線は天使と戦っている”と。

「天使……彼女が、おまえらの敵だっていうのか？」

「ああそうだ、一緒に飯なんか食ってと消されちまうぜ？」

食事中も長ドスを傍らに置いた藤巻が脅すように俺を見ってくる。

まさか彼女が一人で飯を食っている理由は、彼女に近づくものは消えてしまっから——などと考えてすぐに思考を打ち消した。

「なんだよつ、天使つて女なのかよ!? どう見ても人間じゃねえか」

「あれが仮の姿、ということも考えられますよ」

「Oh, it's fake」

「……………」

「くそつ、てつきり羽とか生えた素っ裸のやろつかと思っただぜ…

…」

「うわっ、裸なんて破廉恥だよ!」

「もやはただの変態だろ、それは」

そして何故か大山だけが場にそぐわないツッコミをしていた。

「そんなあからさまなのがいるわけないじゃない! とにかく、彼女は敵よ。わかつたら一緒にお昼を食べるようなマネはしないように。いい? これは忠告じゃない、命令よ」

「……………」

「わかつた?」

長机に並んだ面々を見渡す。

ゆりの言葉を否定する奴は当然いなかった。

「……………ああ」

俺は小さく頷いて席を立つ。

「ちよつと!?!」

「飯、取り行くだけだ」

俺が汁だけ残ったどんぶりを回収しに戻ると、立花はレンゲを置いて静かに座っていた。

俺を待っていてくれたのかもしれない。

「わりいわりい、仲間が呼んでてな」

「……………彼女達と、友達なの?」

敵対しているというだけあって、ゆりの方を見た立花が少しだけ表情を変えた。

「ああ、なんだ？ 俺があいつらの友達じゃおかしいか？」

「そんなことはないわ。けど」

「けど？」

「あなた、変わっているのね」

立花の言葉の意味がようわからなくて、おまえ程じゃねえよ、と無難な答えを返した。

「そんなわけでちょっと色々あって一緒に飯、食えなくなっちゃった」

一緒に食べるなどと中途半端な約束をしてしまった分、罪悪感がある。

かといって彼女がそれを期待していたようには見えないけれど。

「本当に悪いな」

「どうして謝るの？」

俺が謝るのは当然だと言うのに、立花は俺を責めるわけでもなく先と同じ台詞を口にした。

「いや、悪い。じゃあ」

多分こうやって向き合って飯を食う日はもう訪れないのだろう。漠然とそう思いながら俺は盆を片手に席を立った。

「海北君」

「なんだ？」

「麻婆、ごちそうさま」

「……あ、ああ」

その時の彼女があまりに普通の少女のようで。
おまえは本当に天使なのか？ そんな疑問など、俺には口に来るはずもなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1198v/>

Angel Beats！ Another Story - 空 -

2011年10月7日19時14分発行